

改訂版の序

“共有”

本書は、筆者の久留米大学消化器内科在籍時代の研鑽や地元勉強会で行ってきた議論をもとにした胃X線読影に関する書籍で、2015年に初版が発刊され10年の月日が流れました。この間の2022年10月6日に恩師・馬場保昌先生が逝去されました。馬場先生を敬愛する弟子一同を代表して、謹んでご逝去を悼み、生前の多大なるご指導に対して御礼申し上げます。

世の中を席卷したコロナ禍を経た今回、光栄にも本書のアップデートの機会をいただきました。改訂版では、誰もがより共有しやすい内容への更新を目指し、診断の根拠となる「読影プロセス」を根本的に新しく組み立て直しました。

自身への問いは、X線や内視鏡検査、医師や技師、ビギナーやベテラン、臨床や病理を問わず、みんなが共有しやすくするためにはどうしたら良いか？です。元来、人には個性があって、個人個人それぞれに感性や知識、経験の違いがあり、ものごとの見方・考え方は基本的に異なります。しかし、どこかに何かしらの接点、類似点や共通点もあり、それが共有の鍵となるはずで。

馬場先生の病理学の師である故中村恭一先生は、こう述べられていました。「個々の事象に関しては各専門分野において詳細な研究がなされている。一方、個々のバラバラである事象や各論、既知の概念・理論などがどのような関係によって相互に関連し合っているのかはよくわかっていない。大切なことは、これらを整理統合して俯瞰的、総論的に体系づけることであろう。」晩年の馬場先生は、胃癌のみならずすべての胃病変を含む「胃X線形態診断学の体系」の構築に没頭されていたように思います。

医学は常に日進月歩であり、近年は消化管画像診断分野もAI時代に突入しているようです。時代は目まぐるしく移り変わっていきませんが、変わらない普遍的なものもあると思います。恩師の“志”の継承と革新のために筆者がたどりついたひとつの答えが、「立体的異型度」です。

本書の改定にあたっては、多くの助言やご尽力をいただきました羊土社編集部スタッフおよび関係各位のみなさまに感謝します。

2025年夏 久留米にて

佐賀県健康づくり財団
中原慶太